白梅学園大学・短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.21　49 ～ 60（2016）

２歳児における他者とのかかわりに関する研究の動向

Review of Studies in Relationships of 2-year-old child to others.

子ども学研究科　子ども学専攻（博士課程）　寒河江　芳枝
発達臨床学科　佐久間　路子

研究ノート

第１章　問題と目的

本論文では、２歳児を主な対象として行われた研究を対象に、特に他者とのかかわりの中で、どのような発達的特徴が見られるのかを検討していきたい。２歳児を対象とした理由として、第一に、近年、幼稚園で２歳児保育を実施している園が増加しているという点が挙げられる。２歳児クラスに相当する子どもを受け入れている園は、2012 年の調査[1)] によると、私立幼稚園では 366 園中 39.7％で、2007 年の調査（26.4％）に比べ 13.3％ポイントが増加している。増加の背景としては、少子化が進む中、近隣に同年齢の子どもが少ないことや、親子だけで過ごす時間の煮詰まり感といった保護者側の要因が推察される。また入園前に幼稚園で生活すること（プレ保育）は、園の雰囲気を体験し、入園に向け、子どもと相性のいい園を選ぶ機会にもなっていると考えられる。このように２歳代から、保護者も集団生活を送る機会を持つことを期待しており、２歳児の他者とのかかわり、特に同年代の子どもとかかわる機会や時間が、ますます増加していると考えられる。２歳児の同年代の仲間との関係については、保育所に通う子どもを中心に、研究が蓄積されてきている。本論文では、他者とのかかわりとして、家庭での保護者とのかかわりだけでなく、同年代の仲間や保育者とのかかわりについて行われた研究を含め、発達的特徴を明らかにしていきたい。

第二に、２歳代は自我が芽生え、自己主張が強まる時期であり、この時期の子どもは他者とのかかわりの中で多くの葛藤を経験することが予想される。これまでに第一筆者は、甥Ｙの誕生から６年間の記録を取り、Ｙが経験した葛藤に着目し分析を行っている[2)]。発達に伴い葛藤への対処が変化していき、1，2歳児では直接的要求が多かったが、３歳児になると要求を実現しようとする場面で、他者に対して直接的に要求をぶつけるのではなく、間接的に、いわば『迂回』をするように要求を示すことが見られた。Ｙ児の場合は、迂回行動が見られたのが、３歳であったが、他者との葛藤場面は２歳代から生じることが予想され、２歳代に直接的ではなく間接的な要求表明行動の萌芽が見られる可能性があるだろう。本論文で２歳代の他者とのかかわりに関する研究成果をレビューすることを通して、他者との葛藤をどのように経験し、葛藤に対処していくのかについて考察するための知見を深めていきたい。

改めて２歳児の発達的特徴を挙げると、保育所保育指針[3)] の中の発達過程では、おおむね２歳について、以下のように書かれている。『２歳は、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱など身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。発声が明瞭になり、語彙も著しく増加し、自分の意思や要求を言葉で表出できるようになる。行動範囲が広がり探索活動が盛んになる中、自我の育ちの表れとして、強く自己主張する姿が見られる。盛んに模倣し、事物の間の共通性を見いだ

すことができるようになるとともに、象徴機能の発達により、大人と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しむようになる』。これらの記述の中で他者とのかかわりについて書かれているところに着目してみると、『自我の育ちや強い自己主張が見られる』という記述が見られる。自己主張は他者に向けてなされるため、日々の生活の中で、他者に対する自分の意志や要求を表出する場面、それを他者とともに調整する場面が多々起きると考えられる。保育所保育指針には、同年代の子どもとのかかわりについては「おおむね２歳」についての記述には書かれていないが、園生活を共に過ごす同年代の他者と過ごす時間は長く、その中で、様々なかかわりが生じていると考えられる。

また『年齢の心理学』という著書の中で、麻生・伊藤[4]は、タワー課題や拍子木課題について述べる中で、２歳半を過ぎると、大人の意図に従うにしても逆らうにしても、子どもの意図調整は、象徴的な活動やことばを媒介にして、より微妙に複雑なものになっていくことを特徴づけている。さらに同著書のなかで山本[5]は、２、３歳児の子どもたちの遊びについて、大きい子どもがおもしろそうなことを始めると、小さな子どもたちがそれを次々にまねると述べている。また調整的な行動については、２歳後半になれば大人の調整の理論をとりこみつつ他者を説きふせようとするようになり、さらに３歳も近づくころには自分自身が大人の位置に立って、第三者として他の子どもたちの行動を統制し始めたりするというように、大人とのかかわりをもとに、他の子どもたちとのかかわりへと広がりをみせること、またその調整方法も、大人を介して学ぶようになることを示している。

以上の２歳代の特徴を踏まえ、本論文では、他者を意識し始める中で、２歳児は他者とどのようにかかわりを持ち、他者に対して自己をどのように表出するのかについて、これまでの研究知見を概観していく。まずは、この時期に発達が進む言語について、子ども同士および保育者との対話に関する研究を取り上げ、他者とのかかわりを言語面のやりとりから検討する。次に、仲間とのやりとりやあそびにおける模倣に着目する。２歳児には模倣や象徴能力の発達が進んでいくが、あそびの中で他者を模倣することで仲間との関係が育まれることが予想される。そして自己主張が強まる２歳児において、自己制御や情動制御には大きな発達が見られると考えられるため、情動制御や自己制御に関わる研究にも着目し、整理していく。

以上の３つの観点から研究を概観し、最後に筆者がこれまで観察してきた２歳児の姿と関連づけて考察したい。

第２章　２歳児を中心に４つの視点から他者とのかかわりを捉える

２歳代では、自分の意思や要求を言葉で表出することができるようになり、他者と対話をするようになる。子どもたちの対話の観察研究をとりあげ、言語面における他者とのかかわりについて発達的特徴をみていく。

第１節　対話について

１歳頃から言葉を発する子どもは、２歳頃になると言葉を媒介に他者とどのように言葉を交わすのだろう。遠藤[6]は、２歳児の遊びにおけるコミュニケーション行動の分析において、少ない語彙しか持たない２歳初期児同士の会話では、相手または自己の発話を反復的におこなうことによって発話の交換が維持されている側面が大きく、何回もの聞き返しを必要とするなど、効率の悪さがうかがわれた。しかし、会話を成立させ維持しようという意図は明確に存在し、成立・維持のための基本的・初歩的技能を有していることがむしろ注目されるべきであり、反復的言辞はまさにその技能の１つに他ならないと示唆している。

江口[7]は、幼児のコミュニケーション行動の発達において、遊び場面における２幼児間の相互的言語伝達の分析を行っている。分析によると、２歳前半においては、大人があまり介在しない場面では、幼児同士の間に会話は生じにくいことを

物語っており、この時期での会話行動の発達における大人の役割の重要性を示唆している。２歳後半については、本研究では２歳後半と３歳前半をペアとした組が多かったため、明確な断定を下しにくい側面はあるが、ペアの相手である３歳前半児とほとんど変わらないように見受けられている。おそらく、２歳前半から後半にかけて、幼児の会話行動は大きく発達をとげ、大人の存在がなくとも、ある程度、幼児相互間において言語伝達しあえるほどの技能を獲得するものと思われると結論づけられている。

山本[8]は、「幼児間の会話発生期」と位置づけられた２歳後半から、「幼児間の会話発達における質的転換期」として抽出された４歳台までを対象とし、幼児間における会話の自然発生過程を質的に分析した。その結果、遊び活動での遊具という事物が媒介されなくても幼児間での言語交流が２歳後半頃から為されていた。その意味において、子どもたちは、ともに関わりあう中で相手の気持ちを受け止め、自分の気持ちを伝えるなど、共感しあう関係を深め、子どもたち同士の世界をさらに広げていく可能性を秘めている。また、コミュニケーション研究というアプローチにおいて発話プロトコルを分析していくと、一見無意味と思われる言語現象の中に、人間関係や共同行為が存在することを確認することが証明されていることを示唆している。

淀川は、２－３歳児が言葉を媒介にコミュニケーションした場合の特徴を明らかにしているが、ここでは「対話」について４つの視点から論じる。一つ目の研究[9]は、保育者が２－３歳児の発話行為を受容し応答した場面に着目し、２－３歳児の発話に対する保育者の応答と、さらなる２－３歳児の発話の特徴を明らかにすることを目的としている。その結果、２－３歳児が要求以外の情報を提示する場合、保育者の応答は言葉を用いている場合もそうでない場合もあるが、いずれも肯定的な応答を得やすく、その応答を受けた２－３歳児はさらに発話する行為を楽しむ様子が見受けられた。また、２－３歳児が自らの要求を主張する場合、保育者からの言葉を用いた応答を得やすく、その応答に乗じることで、要求と現実との間での葛藤状況から脱しうることを経験していた。このように、２－３歳児が保育者からの応答を受けとることで、発話行為を楽しんだり、葛藤状況から脱したりするという経験をし、他者との二者間対話において発話行為を経験し学んでいることが示唆されている。

二つ目の研究[10]は２－３歳児における保育集団の対話の発達的変化についてである。結論は、２～３歳の時期に他児の発話を模倣することで叙述や確認を行うだけでなく、他児の発話とは異なる表現で、いわば「自分らしい表現」を使って叙述や確認を行い、様々に話題を展開することができるようになっていくことが示唆された。

三つ目の研究[11]は「確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して－」の視点であり、四つ目の研究は[12]は、「伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して－」の視点である。前者は、２－３歳児の保育集団における食事場面での対話の変化についての特徴を明らかにすることを目的とし、後者は伝え合う事例に焦点をあて、２－３歳児同士がどのように伝え合っており、その特徴はどのように変化しているかを検討している。その結果、後期になると話題や話題への評価を共有し、特に他児の示した話題への評価を共有した上で自らの評価を述べるという特徴が見られるようになったことを示唆している。また、他児の発話に関連づけて自分なりの新たな情報を追加し、さらに関連する話題に展開するというように、話題の深まりや展開も見られるようになった。加えて、自他の主張が食い違った場合に誰かが妥協案を提示しそれを受け入れる、自分が身を引いて気持ちの安定を保つというように、他児との折り合いをつけながら対話するようになったことが明らかにされている。

以上、「対話」について２歳児の特徴を取り上げた。２歳児初期は、語彙数も少ないため会話を

維持することは難しいとされていたが、大人が介在することによって会話が成立している。２歳後半になると大人の介在が常時なくとも会話が成立するようになり、「自分らしい表現」を使って叙述や確認を行い話題を展開するようになり、他児の示した話題を共有した上で自らの評価を述べるなどの特徴も見られるようになった。そして、自他の主張の食い違いには、他児と折り合いをつけながら対話をするようにもなることが明らかにされている。特に淀川の研究は、これまでに三者以上の集団での対話について検討したものは少なく、かつ異なる場面における集団への宛先の広がり方について検討したものはないことから意義ある研究といえるだろう。しかし、観察は６ヶ月間の子どもの姿であるため、子どもを発達的に捉えるためにはより継続的に観察を行うことが必要であろう。また、淀川が述べているように保育学の営みを一年を通して日々織りなされるものであると考えるならば、より縦断的な研究方法が求められるだろう。

第２節　仲間とのやりとりやあそびにおける模倣について

江口[13]は、乳幼児期初期における同輩関係の発達の様相について述べている。研究によると、生後１年目の同輩に対する社会的行動の最も初期形態であるか否かの点でまず問題となるのは、新生児の「もらい泣き」現象であると捉えている。生後１年目後半における仲間への社会的行動の発達の一般的特徴として一つ目は、相手への働きかけや相手の働きかけに対する反応が積極的になり、二つ目は社会的行動の相互的交換がある程度可能となる。そして三つ目は、行動様式がより多様化することが挙げられた。

齋藤[14]は、１～２歳児が、保育の場での自然発生的な遊び場面において「仲間と同じ物に関心をもつ」という行為に着目し、仲間と同じ物に関心を向けた際の物への働きかけ方を詳細に分析することによって、仲間と物とのかかわりについて明らかにすることを目的としている。それによると、仲間が別のおもちゃで遊び始めると、今まで遊んでいたものをすんなり止め、仲間が使っている物に興味が移る姿が見られた。このような「仲間が別の物や新しい物に関心をもったり、それを使い始めると、自分もその物に関心をもつ」という現象は、物自体に関心があるというよりも、「仲間が使っている物」に関心をもつことを示しているのではないかと考察している。仲間と同じ物をもつ、同じ場を共有すること自体が、仲間とのかかわりを結びつけている可能性も示唆されている。

大桑[15]は、保育現場における子ども同士の関わりの中で見られる模倣について遊び場面を直接観察し、そのカテゴリー化について吟味検討し、３歳未満の子どもの仲間関係の中で見られる模倣の機能について論じている。観察された事例から子どもたちの関わりの中で見られる模倣を「学習による模倣」「コミュニケーションとしての模倣（模倣がコミュニケーションとして機能する際にも多様な使われ方をしていることを示す）」「表現としての模倣」という３つに分類している。子どもたちが模倣を通じて他児から学び、相互に楽しくコミュニケートし、他児を真似ることで表現し豊かな集団生活を送ること、また模倣によって子どもたちの心が豊かに現れるという模倣のあり方も見られた。

瀬野[16]は、２～３歳児が仲間同士の遊びのなかでいかに共有テーマを生み出すかを検討している。瀬野は、相互模倣を通して子どもたちが対話を成立させているという Nadel の示唆をふまえ、遊びの中で共通のテーマが立ち上がることを“共有のテーマ”の成立と呼び、共有のテーマの成立過程を詳細に調べている。とくに、遊びの中でテーマが立ち上がるまでの流れとテーマの成立に身ぶりや言語、事物が果たす役割の二点に着目し、仲間同士の遊びを成立させている要因を検討している。観察より明らかになったことは、相互模倣は言語的コミュニケーションの確立に伴い、相対的に減少していくものと思われるが、「コンタクト」

の成立を確認する役割を果たす相互模倣は、人と人の結びつきを支えるものとして、幼児期後半や大人になっても形を変えて残存していく側面をもっているように思われることが示唆された。さらに、遊びの変化に関わる要因を特定することには限界があるが、前半に〔相互模倣〕や〔繰り返し〕が頻繁に観察された事実は、一定の示唆を与えてくれるように思われることが論じられている。

中道[17]は、どのようにして年上のきょうだいが、トドラーを社会的ふり遊びへ参加するように導くのかを検討している。研究結果は、Rogoff（2003/2006）の「導かれた参加」の観点を用いて論じている。それによると、26人の年上のきょうだい（平均年齢＝５歳５ヶ月）が、彼らの年下のきょうだいであるトドラー（平均年齢＝１歳11ヶ月）の前で、オヤツを本当に食べる様子（本当条件）と、オヤツを食べるふりをする様子（ふり条件）が観察された。年上のきょうだいは、本当条件よりふり条件で頻繁にまた長い時間微笑し、トドラーを注視し、効果音をより使い、オヤツ動作をより行った。行動系列分析の結果は、ふり場面においてきょうだい間で表情や動作の模倣が生じていたのではないことや、きょうだいがふり動作をして、トドラーを注視し、微笑するといった特定の行動パターンを呈示した後に、トドラーはふり遊びに参加する傾向があることが示された。中道は、本研究で観察されたふり場面におけるきょうだいとトドラーのやり取りは、「導かれた参加」の基本過程としての「意味の橋渡し」であると述べている。

以上、仲間とのやりとりやあそびにおける模倣について研究を整理したが、特に相互模倣はこの時期に盛んに見られる特徴的な行為と考えられる。また相互模倣の形態の中でも「コンタクト」の成立を確立する役割を果たす相互模倣は、人と人の結びつきを支えるものとして、言語発達が進んだ幼児期後半や大人になっても形を変えて見られる行動であることは興味深い。さらに齋藤の研究では、子どもが仲間の遊んでいる物に興味を持ち取ろうとするという行為は、物自体に関心を持っているのではなく、仲間が使っている物に関心を示していると考察されている。仲間と同じ物をもつというのは、行為の模倣と言うこともでき、仲間とのかかわりを結びつけているのは、興味を向ける物でもあり、そしてその物に関わろうとする行為の模倣であるとも言えるだろう。

第３節　自己制御について

１．相互交渉場面における拒否

他者との相互交渉場面においては、相手の要求と自分の要求が異なった場合に拒否行動が示される。以下では、まず１～２歳児の食事場面の中で見られる「拒否」行動について取り上げる。

河原[18]は、１～２歳児の食事場面について２つの目的を立て研究を行っている。一つは、子どもの拒否行動を含む保育者との相互交渉にはどのようなパターンがあるかということ、もう一つは子どもの拒否行動への保育者による対応は子どもの食行動の発達に伴ってどのように変化するかということである。観察の結果、相互交渉のパターンとしては、単発的拒否、継続的拒否、拒否後受容、受容後拒否の４つのパターンに分類された。一方、保育者の働きかけは、「異なる食べ物（前回促したものと異なる食べ物を子どもに再度促す）」、「見通し（おかわり、食事の終了などの見通しについて説明して食を促す）」、「他の視線（アンパンマンなどのキャラクターや他児＜他者＞などが対象児の食べる様子を見ているからと言って食を促す）」、「ふり（キャラクター等になったふりをさせて食を促す）」とし、それ以外の行動として「その他の摂食（上記以外の行動ないし発話によって＜再度＞食を促す）」としている。これによると、４つの特徴的な接触促し行動には、子どもの食行動の発達に伴って「異なる食べ物」が減少し、それに伴って出現してくる「ふり」が見られた。そして、観察期間中一貫して見られたのが、子どもの反応が変化していく「見通し」「他の視線」という特徴があることが示された。

さらに河原ら[19]は、家庭と保育園の比較から食事場面における1、2歳児と養育者の対立的相互作用について調査している。それによると、19か月未満では、保育園より家庭の方が受動的摂食や拒否行動が多く、その出現傾向は食事の前半と後半では異なっていた。19か月以上では、家庭でのみ1分以上続く泣きがみられ、そのきっかけは親子の確執であることが示唆された。これらにより、1、2歳児の拒否行動には2つのタイプ（①保育園で食事の後半に見られた「満腹・終了」を意味する拒否、②家庭の前半の拒否は、食事をとりたくないわけではないといった相矛盾する拒否）があり、対立的相互作用の発達について行為主体としての自己の発達との関連で考察されている。1～2歳児の拒否については、拒否はするものの、先の見通しや他者の存在によって相手の要求を受け入れられるようになっていくことが明らかになっている。同時に保育園と家庭における拒否のタイプが異なっているということは、1～2歳児であっても集団生活の場とそうでない場を見極めていることも証明されている。

以上、1～2歳児の「拒否」については、拒否はするものの、先の見通しや他者の存在によって相手の要求を受け入れられるようになっていくことを示唆し、保育園と家庭との区別もできていることを明らかにしている。次に、「家庭での言語コミュニケーションにおける情動制御」について述べる。

2. 家庭での言語コミュニケーションにおける情動制御

ここでは、他者との関係の中で不快な気持ちをどのように表出するのかという視点で研究を整理していく。方法としては、実験場面と観察場面のどちらかを用いて研究がなされている。

Dunnら[20]による研究は、観察より日常場面を設定し、子どもがどのように自分の気持ちを表現するのかということを言語コミュニケーションの発達から分析調査した。データは、2つの縦断的研究で記録されている。研究1は43人の第二子の子どもが、18カ月と24カ月の二時点で、母親と年上のきょうだいと一緒に過ごしている状態で記録されている。研究2は、16人の第一子が、25カ月と32カ月の二時点で母親と年下のきょうだいと一緒に過ごしているところで観察されている。2歳児までに示された両方の研究では、多くの子どもたちが、自己と他者において感情状態の範囲に言及していた。彼らは、様々な文脈において感情状態の原因を話し合っていた（ふり遊びも含んでいる）。43人の第二子の子どもの中で18カ月で自分の気持ちについて積極的に話す子どもは、24カ月でも自分の気持ちについて積極的に話す中心的な存在であった。その子どもは、自分の気持ちとの関係を母親や年上のきょうだいによって作られていた。男児よりも女児の方が、より頻繁に母親と年上のきょうだいに自分の気持ちを話しに出していた。24カ月までは、女児自身が、男児よりも頻繁に自分の気持ちに言及していることを明らかにしている。

次にDunn[21]は、24カ月の子どもたちが、どのように自身の関心を他の行動で表すかという事例を取り上げている。事例は、2歳児の女児が部屋の中を跳ね回り、テーブルの上に置いてあるチョコレートケーキを見つけると、母親にエプロンをしてチョコレートケーキを食べたいと話すが、母親はチョコレートケーキを食べられないことを話す。すると、女児は疲れたと言葉を発する。母親は、女児の疲れたという言葉に対しては心配するものの、チョコレートケーキは食べてはいけないことを伝えている。Dunnは、自分の都合のよいように相手の行動を変えるために、実際の自分の状態とは異なる状態のふりを子どもがしていると解釈している。

情動制御と発達の個人差について検討している坂上[22]の研究では、歩行開始期における情動制御の発達的変化を調べるため、マイルドなフラストレーション状況における19人の子どもの行動を、生後18カ月、24カ月の二時点において観察した。実験課題は、子どもが他者からの支援を積

極的には受けられない状況下で、玩具の入ったロックのかかった箱を開けることが課された。観察結果より、歩行開始期には、対処行動が状況に応じてより有効に組織化されるようになり、これにともなって、自律的な対処への移行が推し進められることが示唆された。さらに本研究では、情動焦点型の対処として複数の気晴らし行動が観察されたが、この時期に見られる気晴らし行動には、不快情動の沈静だけでなく、自発的な快情動の創出という、より積極的な機能があるのではなかと述べられている。

金丸・無藤[23]は、母子の葛藤場面における２歳児の情動調整プロセスを、子どもの不快情動変化として捉え、その個人差を検証している。その結果、不快情動変化タイプは、「継続型」・「沈静型」・「非表出型」に分類された。「継続型」の子どもは、不快情動の原因を除去する積極的な働きかけを行い、「非表出型」の子どもは、自ら気紛らわしや他の活動を行い、母親は子どもの自発性や能動性に寄り添っていた。「沈静型」の母親は子どもの不快情動を沈静するための積極的な働きかけを行い、sensitivity と structuring が葛藤場面で高くなった。このように、自律的な調整や、原因を除去しようとする行動が可能になり始めるが、不快情動が沈静するには、母親の助けを必要とするという、自律性や他律性が混在する２歳児の情動調整の特徴が明らかになっている。

また金丸・無藤[24]は、情動調整プロセスの個人差に関する２歳から３歳への発達的変化について検討している。研究の目的は３つある。一つ目は、不快場面に置かれた３歳児を対象に、快、不快情動の変化から捉えた情動調整プロセスの個人差を明らかにすることである。二つ目は、同一の子どもについて２歳時点から３歳時点への情動調整プロセスの個人差の変化を示す。三つ目は、不快場面での情動調整行動を検討し、３歳児の情動調整の自律性を明らかにする。結果としては、情動調整プロセスの個人差について、不快情動から捉えた情動調整プロセスタイプの中に、快情動変化から捉えた個人差が存在することが明らかになった。情動調整プロセスの個人差の変化については、２歳時に不快情動を表出した多くの子どもが、３歳時には不快情動を表出しなくなることや、２歳時に快情動を表出しなかった子どもの多くは、３歳時に快情動を表出したことを示している。また、情動調整行動に関しては、他の活動を積極的に行ったり、気紛らわし的行動が増え、より自律的な行動が増えることを示した。３つの視点より、３歳児は２歳児と比較して、より自律的で適応的な情動調整が可能となることが示唆されている。

最後に、自己主張の発達的変化を検討した野沢[25]は、１～２歳の子ども同士のやりとりについて検討している。研究目的は、１～２歳の仲間同士における自己主張の発達的変化を明らかにすることであり、保育所の１歳児クラスを対象として約１年間の縦断的な観察を行っている。それによると、自己主張がなされる場合、１歳前半には発声による主張が特徴的にみられること、２歳前後にかけて不快情動の表出を示す行動が増加し、その後は減少すること、２歳後半にかけて情動や行動を制御した発話や交渉的表現など、よりスキルフルな自己主張が増加することが示唆されている。自己主張の発達を検討する際には、声のトーンを含む情動的側面に着目することや、個々の子どもの発達的変化を考慮することの重要性が挙げられている。

以上、２歳児になると自分の気持ちや主張をするだけでなく、自己を制御することが少しずつできるようになってくる。Dunn の研究では、ふり行動をすることで相手の気持ちを引くことが明らかにされたが、坂上や金丸らの研究によると、自分の要求を他のことで満たそうとする気晴らし行動や情動調整プロセスにおいても、２歳後半にかけて情動や行動を制御した発話や交渉的表現が表れ、不快情動を調整する方法として、自ら気紛らわしや他の活動を行う姿が新たに見られた。すなわち、これらの行動は不快情動の沈静だけでなく、自発的な快情動の創出という、より積極的な

機能があることが明らかにされたことは、意義があることといえるだろう。

これらの研究は、発達的変化を調べるために二時点で観察を行っているが、ある時点とある時点という、いわば点と点の関係であり、ある時期からある時期までの過程を追った観察、すなわち線の関係を調査対象になされていない。今後は、子どもが気晴らし行動や気紛らわし行動を行うまでのプロセスを検討する必要がある。次は、２歳児の養育者（保育者・母親）の観点から捉える。

３．２歳児の養育者（保育者・母親）の観点

坂上は、反抗期に対して特に母親に着目し、母子の共変化過程に関する４つの研究を行っている。

一つ目の研究[26]では、子どもの意図的な反抗や強い自己主張が現れるとされる１歳代後半から２歳代にかけて、母親の対応が子どもの行動の変化に伴いどのように変化していくのかを、一母子のやりとりの縦断的観察によって探索的に検討している。結果、Ⅲ期（23～27カ月齢）のいずれの場面においても、言語による活発な交渉が母子の間でみられるようになった。意図の対立がおこった時に互いの間に距離をおこうとする、距離化の行動もみられている。また、対象児Ｋと母親双方の意図や、やりとりの相互性、互恵性の意識化させる母親の対応は、Ｋが母親に伝えている行為の社会的意味や、母親の意図が理解できるようになり、Ｋ自身の要求・拒否が多様な方法で明確に訴えられるようになったことを示唆している。

二つ目の研究[27]では、質問紙調査による検討から子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応の横断的変化とその背景要因を明らかにしている。その結果、子どもの発達的変化に促される形で母親が、母、子双方の意図に焦点化した、相互調整的、互恵的なやりとりを育てる対応を子どもの反抗・自己主張の時期に身につけていくことが示唆された。

上記の二つの研究の結果に共通して示されたことは、この時期の経験を通じて、母親の対応に柔軟性が増し、子どもの理解者としての役割とソーシャライザーとしての役割という親としてとるべき２つの役割の分化と統合が進むという、母親の変化過程である。このように子どもの反抗期の経験を、母親の視点から共変化過程として明示したことは、非常に意義のあることといえるだろう。

そして、３つ目の研究[28]は、質問紙調査による子どもの反抗・自己主張に対する母親の受け止め方である。結果としては、反抗期の始まりに際して255人中、約51％の母親が肯定的な感情や考えを持ったと回答し、255人中、約46％の母親は苛立ちや困惑といった否定的感情を持ったと回答した。この結果は、二つ目の研究結果と矛盾しないものであり、子どもから初めて強い反抗や自己主張を受けるという経験の新奇性が、子どもが反抗期を迎えた時の母親の反応に影響（母親が持つ否定的育児感情）している可能性があることを示唆している。また、回答時点でも多くの母親は肯定的な意見や感情を持っていることが明らかになった。

さらに四つ目の研究[29]では、子どもの反抗・自己主張に対する母親の適応過程について面接調査を行っている。結果、初めて親になった人にとってはこの時期が、子どもとの大きな対立を経験するおそらく初めての機会にあたり、それゆえに、子どもの変化に適応していくためのメカニズムを作り上げていくことが必要になることを示唆している。また、この時期の子どもの変化、あるいは子どもとの関係性の変化として、「意思疎通、相互理解が可能になった」「子どもと一緒にいるのが以前より楽しくなった」という内容が挙げられていたが、これらの発言は母親が、それまでとは異なる形で、子どもとの心的な一体感やつながりを持ちうるようになったことを明らかにしている。

一般に２歳児のイヤイヤ期が始まる頃になると母親は、この時期の子どもに対して否定的な感情を抱くのではないかと考えられていたが、後半の２つの研究より、子どもが反抗期を迎えたときに母親の反応に否定的育児感情の可能性

があることを示唆しながらも母親が子どもの反抗期を肯定的に受け止めていること、子どもとの関係性の変化についても肯定的であるということが明らかになった。

野沢[30]は、１～２歳児の葛藤的やりとりにおける自己主張に対する保育者の介入において、子どもの行動内容との関連の検討を行っている。子どもの自己主張と保育者の介入との関連には、子どもの月齢による違いもみられているが、<相手の身体への働きかけ>以外の子どもの自己主張に対して、【状況の明確化】や【方略の提示】の割合が、２歳後半においては比較的高い傾向があった。子どもの発達に伴い、情動制御の主体は、養育者から子どもへと移行すること、すなわち、子ども自身による情動制御が増加することが指摘されている。

以上、「自己主張や自己抑制を支える養育者（保育者・母親）」について整理した。母親視点による坂上の調査では、母子間で意図の対立がおこった時にお互いの間に距離をおこうとする、距離化の行動も見られている。そして、母親は子どもの理解者としての役割とソーシャライザーとしての役割という、親としてとるべき２つの役割の分化と統合が、子どもの反抗期の経験を通して進むと解釈されている。

しかし、これまでの研究において足りない点は、個人差について検討されていないということである。それぞれの子どもたちに個性があるように自己主張するには、各々の子どもたちが、どんな過程を得ているのかということ、さらにそれについて養育者はどのような援助を行っているかということを明らかにしていく必要がある。

第３章　まとめと今後の課題

本論文では、他者とのかかわりについて焦点を当て「対話」、「仲間とのやりとりやあそびにおける模倣について」、「自己制御」の３つに分けて研究を概観した。

論文を整理した結果見られた動向は、２歳児という年齢は非常に変化が著しい年齢であるということである。この時期の子どもたちは、他者とかかわるために様々な方法を用いてかかわろうとしている。「対話」においては、２歳児の初期は語彙数が少ないために大人が仲介役をすることで会話を成立させることができる時期である。しかし、語彙数が少ないこの時期であっても、子どもたちは他者とかかわろうとし、語彙数が乏しいだけに面白いやりとりも見られる。これらの知見を具体的な子どもの姿に当てはめてみると以下のような例が挙げられる。

筆者（未発表）が２歳児クラスを観察していた際、ある女児が玩具で遊んでいる男児向かって「カシテ」と言うと、男児は「ダメヨ」と応答していた。両者は、このような会話のやり取りを続けているが口論や喧嘩をするのではなく、むしろ女児は男児に近寄る。そして、「カシテ」「ダメヨ」という会話を続けながら対話の芽生えのような姿が見られた。２歳児後半にもなると他者の考えを受け入れながら「自分らしい表現」を用いて、自分の考えを表出するようになる。同時に他者と考えが異なる場合には、自分の考えと折り合いをつけながら会話を成立するという方法も獲得していく。

仲間とのやりとりやあそびの中に模倣が見られる。模倣というと身体模倣や言語模倣があるなかで、齋藤[14]は「仲間が別の物や新しい物に関心をもったり、それを使い始めると、自分もその物に関心をもつ」という現象は、物自体に関心があるというよりは、仲間が使っている物に関心を持つことであると述べている。すなわち、仲間と同じ物を使っている、あるいは同じ場にいるということは、仲間とかかわりを持つことを意味していることが明らかにされている。筆者は、２歳児前半の子どもたちの関わりを見たときに齋藤が言うような姿を見ることができた（未発表）。ある男児が目当ての玩具に向かって走りその玩具を手に取ると、後ろから女児が駆け寄り男児が持っている玩具を奪い取る。仕方なく男児が他の玩具の所に行き新たな玩具を手に取ると女児は手に持って

いる玩具を床に置き、男児の後を追い同じ行動を示した。言葉が上手く表出できない子どもにとって、この姿は他者を意識し、他者とかかわりたいという意味を示しているように思われる。

「自己抑制」においては、直接的に自分の思いを相手に主張することが上手くいかないことが分かると、気晴らし行動や気紛らわし行動など間接的な行動が見られるようになった。一方、養育者の役割は重要であり、彼らは子どもの理解者であり、ソーシャライザーであることを挙げている。さらに結果より、距離を置くことなども大切なことであると示唆している。筆者が見てきたこの時期の子どもの姿として気晴らし行動や気紛らわし行動ともいえないそらしに近い行動がみられた。例えば、食事場面において2歳児の男児は、嫌いな物が給食に出ると食べようとしない。保育者が、男児の隣に座り、スプーンの上にその嫌いな物を少しのせ口まで運ぼうとすると男児は「ねむい」と話し、寝たふりをすることがあった（未発表）。

このように、2歳児の特徴を取り上げてきたが、2歳児を様々な角度から見ると、自己の発達と共に他者とどう向き合っていくかという過程の途中段階のように思われる。木下[31]は、6つのレベルを挙げる中で2歳児前半は表象レベルでの自他視点の混乱の時期であり、2歳児の後半になると内なる他者を媒介にした自他理解の時期であると述べている。木下の論からも分かるように、2歳という年齢はとても興味深い年齢である。その過程の行動レベルでは、不快な感情を抱いたときに単に拒否的行動を示すだけでなく、気紛らわし行動や気晴らし行動が見られることが分かった。2歳児が不快な感情を単に主張するのではなく、相手の気持ちを汲み取りながら、自分の気持ちを快情動へと移行する道すじはどのようになっているのだろう。しかし、これらがどのようなプロセスから生起されたものかということについては明らかにされていない。2歳児が他者とかかわり、自分の思いを自分なりに調整していく過程を明らかにすることで、2歳児の他者との関わりの特質がより明らかになるのではないだろうか。これを明らかにするには縦断的研究が必要になる。なぜならば、問題とされている行動が生起する前後を細かく観察することでしかそのプロセスを明らかにすることができないからである。今後は、ここで明らかになったことを養育者や保育者に伝えることで、筆者の研究が実践に還元できることを課題とし、研究をさらに進めていきたいと考えている。

引用・参考文献

1) ベネッセ教育総合研究所（2012）第2回幼児教育・保育についての基本調査報告書
2) 寒河江芳枝（2011）『子どもは、生活の中で葛藤をいかにのりこえるか― 一児の0歳から6歳までの縦断的観察を通して―』白梅学園大学大学院修士論文
3) 民秋言　編（2008）『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』萌文書林
4) 麻生武・伊藤典子（2000）1歳と2歳　他者の意図に従う力・逆らう力、岡本夏木・麻生武編『年齢の心理学－0歳から6歳まで』ミネルヴァ書房、63-101
5) 山本登志哉（2000）2歳と3歳　群れ始める子どもたち：自律的集団と三極構造、岡本夏木・麻生武編『年齢の心理学－0歳から6歳まで』ミネルヴァ書房、103-141
6) 遠藤純代(1950)2歳児の遊びにおけるコミュニケーション行動の分析、人文研究　北海道学芸大学函館人文学会（編）1号、41-64
7) 江口純代（1974）幼児のコミュニケーション行動の発達　－遊び場面における2幼児間の相互的言語伝達の分析―、人文論究　北海道学芸大学函館人文学会34号、15-37
8) 山本弥栄子（2007）子ども同士の言語的コミュニケーションにおける一考察　－会話の自然発生的過程の検討－、創発　大阪健康福

祉短期大学紀要第５号 .51-60
9) 淀川裕美（2009）２－３歳児と保育者との言葉を用いた二者間対話分析　－保育者が２－３歳児の発話行為を受容し応答した場面に着目して－、家庭教育研究所紀要 31 号 .26-35
10) 淀川裕美（2010）２－３歳児における保育集団での対話の発達的変化－「フォーマット」の二層構造と模倣 / 非模倣の変化に着目して－、乳幼児教育研究　第 19 号、95-107
11) 淀川裕美（2011）２－３歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化－確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して－、保育学研究　第 49 巻第２号、61-72
12) 淀川裕美（2013）２－３歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化－伝え会う事例における応答性・話題の展開に着目して－、保育学研究　第 51 巻第１号、36-49
13) 江口純代（1978）乳幼児期初期における同輩関係の発達、北海道教育大学紀要　第１部 C　第 29 巻第１号、221-233
14) 齊藤多江子（2012）１～２歳児の仲間と物とのかかわり－「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して－、保育学研究　第 50 巻第２号、6-17
15) 大桑　萌（2014）０～２歳児の仲間関係における模倣の役割、保育学研究　第 52 巻第２号、28-38
16) 瀬野由衣（2010）２～３歳児は仲間同士の遊びでいかに共有テーマを生み出すか－相互模倣とその変化に着目した縦断的観察－　保育学研究　第 48 巻第２号、51-62
17) 中道直子（2016）導かれた参加：年上のきょうだいと１－２歳児の社会的ふり遊び、発達心理学研究　第 27 巻第１号、23-31
18) 河原紀子（2004）食事場面における１～２歳児の拒否行動と保育者の対応：相互交パターンの分析から、保育学研究　第 42 巻第２号、8-13
19) 河原紀子・根ケ山光一（2014）食事場面における１、２歳児と養育者の対立的相互作用：家庭と保育園の比較から、小児保健研究第 73 巻第４号、584-590
20) Dunn, J., Bretherton, I. & Munn, P. (1987) Conversations About Feeling States Between Mothers and Their Young Children, Developmental Psychology Vol.23, No.1、132-139
21) Dunn, J. (1988) 2. Confronting the Mother, The Biginning of Social Understanding, Cambridge,Massachusetts:Harvard University Press, 12-44
22) 坂上裕子（1999）歩行開始期における情動制御：問題解決場面における対処行動の発達、発達心理学研究　第 10 巻第２号、99-109
23) 金丸智美・無藤隆（2004）母子相互作用場面における２歳児の情動調整プロセスの個人差、発達心理学研究　第 15 巻第２号、183-194
24) 金丸智美・無藤隆（2006）情動調整プロセスの個人差に関する２歳から３歳への発達的変化、発達心理学研究　第 17 巻第３号、219-229
25) 野沢祥子（2011）１～２歳の子ども同士のやりとりにおける自己主張の発達的変化、発達心理学研究　第 22 巻第１号、22-32
26) 坂上裕子（2005）葛藤場面における一母子のやりとりの縦断的変化－観察による検討―（研究１）、坂上裕子著　子どもの反抗期における母親の発達－歩行開始期の母子の共変化過程－風間書房、68-116
27) 坂上裕子（2005）子どもの反抗・自己主張に対する母親の対応の横断的変化とその背景要因－質問紙調査による検討―（研究 2）、坂上裕子著　子どもの反抗期における母親の発達－歩行開始期の母子の共変化過程－風間

書房、117-159
28）坂上裕子（2005）子どもの反抗・自己主張に対する母親の受け止め方－質問紙調査による検討―（研究３）、坂上裕子著　子どもの反抗期における母親の発達－歩行開始期の母子の共変化過程－風間書房、162-193
29）坂上裕子（2005）子どもの反抗・自己主張に対する母親の適応過程－面接調査による検討―（研究４）、坂上裕子著　子どもの反抗期における母親の発達－歩行開始期の母子の共変化過程－風間書房、194-250
30）野沢祥子（2010）１～２歳児の葛藤的やりとりにおける自己主張に対する保育者の介入－子どもの行動内容との関連の検討―、東京大学大学院教育学研究科紀要　第50巻、139-148
31）木下孝司（2011）ゆれ動く２歳児の心－自分なりの思いが宿る頃－、木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達』ミネルヴァ書房、37-63